

# シナプス

第219号

明るく 優しく たくましく



学友法人 大東中央学園

大東中央  
幼稚園

大東中央幼稚園園長室より  
平成27年1月20日発行

☆園長コラム ☆キンダーカウンセラーコラム  
☆担任の保育日誌から ☆身体測定・万歩計計測・出席率

## 明けましておめでとござぬます 国家百年の計は教育にあり……

定期的に幼稚園の運営状況を確認に来られる前理事長の井上長良先生と園長との最近の会話は、社会情勢・政治情勢・勿論幼稚園の運営状況も含めて多岐にわたりますが、特に多いのが社会情勢と政治情勢に関する内容。

政治情勢では、自民党の勢力が強大になっているのはいいけれど、あまりなことになれば、一党独裁傾向になってしまうことが心配で、一党独裁に一定の歯止めをかけられる力を持つ野党の確立が必要ですねえという内容が多くなります。

社会情勢では、ものすごく多くの報道に見られる“子殺し親殺し”“ひったくり事件”“振り込め詐欺”、通常の報道には上がってこないけれど、大阪府の安全町メールには、毎日おびただしい数の“痴漢”“強制猥褻”“子どもへの声かけ”等の事件が起こっているけれど、これらの根本原因はどこにあるんでしょうかという内容になってしましますが、井上先生はいつも「やっぱり大きな原因は教育でしょうねえそれも家庭教育です」というところに落ち着いてしまいます。

家庭教育と言えば、その始まりは何と言っても乳幼児教育。よく言われる“三つ子の魂百迄”=3歳ごろまでに受けた教育によって形成された性質・性格は、100歳になっても根底は変わらない、という意味=そのものなんです。乳幼児期に十分な愛情を与えられなかった子供は、相手の感情を読み取ったり、自分の意志を伝えるための言語能力があまり育たなかったとの研究報告がよく知られてはいるものの、現実はどうでしょう。

各市で開催されている平成27年度から実施される“子ども子育て新制度”に向けて、その具体策を策定するための子ども子育て会議の資料には、軒並み0・1・2歳児を保育施設に預けたいという保護者がとても多く、統計に現れているいわゆる“待機児童”の大半が、この0・1・2歳児であることが示されています。この現象と前述の“乳幼児期に十分な愛情を与えられなかった子どもは、云々”との整合性を疑わざるを得ません。

“待機児童の解消”策は、今や国家プロジェクトとして喧伝されていますが“国家百年の計は教育にあり”という言葉を思うにつけ、百年後と言わずとも、20年30年後の日本がどうなってしまうのかが心配でなりません。

比較的著名な教育学者（評論家）が「少子化が止まらないこれからの幼児教育関連施設は、乳幼児をただ預かることだけの施設にすることが、施設生き残りの重要な方策だ」とどこかの誌上で論評されていたのが大いに気になるところです。

月刊誌“MOKU”1月号で、映画監督の河瀬直美氏が記しておられます。『人の喜びとは何だろう。美味しいものを食べること。暖かい布団でゆっくりと安心して眠れること。大切な人と一緒に暮らすこと。隣の人と仲良くすること。健康で過ごせること。そのためには何が必要なのだろう。親が子どもを見守ること。子どもが親を慕うこと。人に親切にすること。笑顔でいること。そう出来るのは教育だ。』

辻本 博人